

武蔵野日曜集会

キリストの形成るまで

――ガラテヤ書第4章1～20節――

1965年10月3日(武蔵野)

小池辰雄

存在即使命 律法と福音 神の本願 神を知る 本当の「エピキュリアン」 底光の世界 聖
霊の宿り 初めの喜び 衆生本来神なり 無私 根源の原動力 キリストの御霊の人

【ガラテヤ4】

1 われ言う、世嗣は全業の主なれども、成人とならぬ間は僕と異なることなく、² 父の定めし時の至るまでは後見者と家令との下にあり。³ 斯のごとく我らも成人とならぬほどは、世の小学の下にありて僕たりしなり。⁴ 然れど時満つるに及びては、神その御子を遣し、これを女より生まれしめ、律法の下に生れしめ給えり。⁵ これ律法の下にある者をあがない、我等をして子たることを得しめん為なり。⁶ 斯く汝ら神の子たる故に、神は御子の御霊を我らの心に遣して『アバ、父』と呼ばしめ給う。⁷ 然れば最早なんじは僕にあらず、子たるなり、既に子たらば亦神に由りて世嗣たるなり。

⁸ 然れど汝ら神を知らざりし時は、その実神にあらざる神々に事えたり。⁹ 今は神を知り、寧ろ神に知られたるに、何ぞ復かの弱くして賤しき小学に還りて、再びその僕たらんと為るか。¹⁰ 汝らは日と月と季節と年とを守る。¹¹ 我は汝らの為に働きし事の或は無益にならんことを恐る。

¹² 兄弟よ、我なんじらに請う、われ汝等のごとく成りたれば、汝ら我がごとく成れ。汝ら何事にも我を害いしことなし。¹³ わが初め汝らに福音を伝えしは、肉体の弱かりし故なるを汝ら知る。¹⁴ わが肉体に汝らの試煉となる者ありたれど汝ら之を卑しめず、又きらわず、反つて我を神の使の如く、キリスト・イエスの如く迎えたり。¹⁵ 汝らの其の時の幸福はいま何処に在るか。我なんじらに就きて証す、もし為し得べくば己が目を抉りて我に与えんとま
で思いしを。¹⁶ 然るに我なんじらに真を言うによりて仇となりたるか。¹⁷ かの人々の汝らに熱心なるは善き心にあらず、汝らを我らより離して己らに熱心ならしめんとてなり。¹⁸ 善き心より熱心に慕わるるは、ただに我が汝らと偕におる時のみならず、何時にても宜しき事なり。¹⁹ わが幼児よ、汝らの衷にキリストの形成るまでは、我ふたたび産の苦痛をなす。²⁰ 今なんじらに到り



て我が声を易^かえんことを願う、汝らに就^{まど}きて感^{まど}えばなり。……

●存在即使命

今日は私の伝道の、前期を終わりました、後期に入りました第一回の集会であります。こないだの9月22日に私の家で伝道25周年記念会をいたしました。また、26日には、ここにおいて藤井武先生35周年記念講筵会『羔羊の婚姻』と題してお話をいたしました。今日は後期第一回という、私にとりましては非常にこのところ重大な時期を迎えているわけです。

また、皆さんも、この集会に心から連なっていっていらっしゃるかぎり、そういう自覚をお持ちだと思っております。我々はキリストの体として一体であるということを常々申しております。今、東京の生活はいろいろ多忙でありますので、日曜に必ずしも来れません。よく分かっております。けれども、その心が、本当にそのような意味において、一つならんとしているかどうかということは、それは言わず語らずのうちに私には分かるんです。

具体的に申しますと、今の三回の集会に無断で欠席した人には私は別れを告げます。そういうはずではなかったです。そういう誠意のない、信義のないことは、私は忍びません。「本当に悪かった」と言っ、心からあやまるならば、私は無条件に許します。けれども、そのハッキリした証言ができないならば、私はハッキリお別れいたします。

そういう気持で私はハッキリと後期を出発いたしますので、皆さんもその気持をもって進んでいただきたい。その気持がなければ、もう今日限りお別れしたいと、こう思っております。どうぞ、そういうことでございますので。

それは私たちの課せられている福音の使命は重大であるからです。

「私がどうであるかである」

ではないんです。我々、この福音に把^{つか}まれているところのもの、キリストに荷^おなわれつつあるところのものが、申し上げているとおり、存在即使命ということを知られたから出して、本当に喜び勇んで希望にあふれて進んでいくのではないならば、それはブレーキがかかりますから。そういうことはこの戦意全体のために、私たちの使命のために非常にマイナスのことであるから。私はこれからそういうことはハッキリしたいと思っておりますから、どうぞ、そのおつもりで。

それから、第三者が言うことは、お互いにどうのこうのと、つまらない噂^{うわさ}はしないこと。人間ですから、うわさもたまにはするでしょう。けれども、私は、一人称と二人称の対話をもつて、どうか私にぶつかっていただきたいと思えます。その他の言葉は私はあまり信用いたしませんから。オープンに気持よく、ぎくばらんに行きたいと思っております。それはどこまでも福音のためであって、その他の何ものでもありません。そういった気持でひとつ臨んでいただきたいと思います。



なお、この9月29日には、私の息子——今日来ておりますが——信雄と、その演劇部の会員である依田牧子さんが結婚をいたしまして、私自身が司式をいたしました。長坂君が、この年長者でもあるし個人的にも多少親しいので、媒酌の意味をふくめて来ていただきました。

それから、今日は午後から、O君とAさんの結婚式があります。彼は今日はみえてないね。身体がそれほど丈夫な人でないから、やむおえませんが。私は自分の結婚式の時はもちろん集会に出てから行きましたが、集会というものは非常に私は生命賭けで皆さんとやっているつもりでありますので、どうか、そういう気持ちで向かっていただきたい。

また、一昨日は学校の関係で一泊で那須という所に——私は那須は初めて行っただけが——参りまして、これはドイツ語科の会合でありました。あそこに茶臼岳という山がある。1900何メートルという、あそこにも登ってまいりました。火山です。硫黄の煙が吹いていて、私もほとんど山頂に近い所まで——更に煙が風になびいて、喉がおかしくなるといけないと思って、山頂までは少し控えたんですけれども——そこまで行きました。非常に広々とした関東平野を望みながら、そこで祈ってまいりました。

お互いさま、いろいろ、生活は忙しいですけれども、いかなる時、所においても、この福音というものは、自分はこの福音に対して使命を持っている者だという、その自覚を深く持っていたきたいと、そう思っています。私が『曠愛新書』を皆さんとの協力において出しておりますが、これは正にこの戦いのための他の何ものでもないのです、どうか、共働のことであるということとを本当に自覚していただきたいと思えます。

●律法と福音

では、今日はガラテヤ書第4章、「キリストの形成るまで」と題してお話します。

「われ言う、世嗣は全業の主なれども、成人とならぬ間は僕と異なることなく、」

パウロが言おうとしていることは、律法と福音との関係であります。また、別な言葉でいうと、旧約と新約の関係です。「世嗣」、即ち神の国を嗣ぐ者は——世嗣というのは相続人ですが——「全業の主」である。全財産の——「業」というのは「産」という字と似た字ですが——主である。けれども、まだ大人にならない、一人前にならないあいだは、別に僕と異なることなく、後見人が必要だからと。

「後見者と家令との下にある」

とすぐあとに書いてあるとおり。即ち、本当に福音を受けるまでは、律法の下にある限りは、律法即ち後見人また家令といったものの役割がこの旧約聖書の律法で、福音への守役である。道德の世界が本當の宗教の世界の前提であるということです。

「日本は未だ旧約時代であるが、やがて本當に新約時代に入らなくては」



ということを藤井先生も仰いました。即ち、孔子の道德というのは、我々にとっては即ち律法であつて――今の若い方は道德なんて言つても、少しも従うことがありませんけれども――いわゆる道德の世界、「すべしすべからず」の世界というものはこの世の前提である。こういうことですね。

²父の定めし時の至るまでは後見者と家令との下にあり。

父の定めし時の至るまで、キリストが時満ちてナザレのイエスとして出現するまで、後見人と家令との下にある。即ち、言い換えると、

「律法と預言者の下にある」

と言つてもいい。旧約の預言者です。最後は洗礼のヨハネですが、その道しるべをした人たち。預言者たちは律法を非常に内面から捕まえた人たちですが、祭司はちよつとそれが外的になる。祭司そのものが何も間違つていなくても何でもありませんが、執成しをする役割をもつていましたが、大事なものですけれども。

³斯のごとく我らも成人とならぬほどは、世の小学の下にありて僕たりしなり。

この場合、「小学」というと、ストイック的な哲学の世界のことをパウロは考えているらしい。パウロはギリシヤ的な教養もありましたから。けれども、

⁴然れど時満つるに及びては、神その御子を遣し、これを女より生れしめ、律法の下に生れしめ給えり。

このことはローマ書8章3節にも出ている。

「³肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。」

「肉」というのは即ち、自己中心であるところの在り方がこの「肉」という。

⁴これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為なり。」(ロマ8:3-4)

罪びと同じ次元にまでキリストは自分を置いたわけです。それは罪にさらされているわけです。しかし、罪の誘惑に彼は完全に勝ちました。この世と罪の在り方ということから逃れるのではなくて、その下に、肉の下に自分を置いている。そして、「霊」に従つてその肉を超越して行つたところの在り方が、このキリストの在り方である。即ち、肉ということと律法ということは、律法を本当に満たし得ない存在であるということが「肉」である。そのような存在形態でありながら、律法を成就したのがキリストですから。そこでそのような在り方は完全に肉を否定しているところの霊の在り方なんです。「肉体」という意味の肉ではないですよ、これは。

⁵これ律法の下にある者をあがない、

即ち、律法の「すべし、すべからず」という世界にあつて、それに縛られてしまつてどう



にもならない。パウロがローマ書7章で、

「ああ、この悩める人なるかな」

と、非常にその煩悶^{はんもん}を訴えているわけです。そこから

「イエス・キリストのゆえに感謝す」

というのは、キリストがその自我中心であるところの存在から、即ち、律法を本当に全うすることができないというその存在から、在り方から贖いとった。

我等をして子たることを得しめん為なり。

肉の即ち律法の奴隷である、僕である。そこから、霊の世界を完全に、神中心の霊的な実存を全うしたところのキリストが即ち、神の子たる実^{じつ}を示したわけです。その実を与えるという。実は我々に得られない実質ですから。自らは得られない実質を与えるというところに、この贖いの、また恩寵^{おんちよう}の意味があるわけです。

●神の本願

6 斯く汝ら神の子たる故に、神は御子の御霊^{みたま}を我らの心に遣して『アバ、父』

と呼ばしめ給う。

キリストの贖いのゆえに、神の方からは、神はいつも私たちを子として認め、その実質を与えようとしておられる。これが即ち、神の本願であります。だから、その贖いを受けとらない限り、その絶対恩寵が自分のものとならないわけです。贖いを本当に受けとるということは、恩恵でありますから、信受^{しんじう}であります。そして、信受することによって——こないだガラテヤ書にも書いてあったとおり、「信受することによって」という——何をそれでは「受」するのか。この「受」は何か。それは御霊である。聖霊である。これが即ち、聖霊を賜って初めて実質、子たるの実が実子となるわけです。だから、実子となりますから、初めて本当に「アバ、父よ」と——「アッバー」というのは「父」というアラミ語です——「父よ」と信頼することができるようになる。「父」と呼ぶためには、この贖いを受けとらなければ「父」と呼べない。本来、神の子ですけれども、これが断絶させられてしまつて、自分の方から断絶してますから、その断絶を神の側から信仰によって回復したというところに、この「アバ、父」と呼ぶことが相即するわけです。

7 然れば最早^{もはや}なんじは僕にあらず、子たるなり、既に子たらば亦神^{また}に由りて世嗣^{よつぎ}たるなり。

もう言うまでもなく、神の国を嗣^つぐものであると。

8 然れど汝ら神を知らざりし時は、その実神にあらざる神々に事^{つか}えたり。

いろんな神々があります。要するに偶像です。学問が偶像になったり、芸術が偶像になったり。事業が偶像になったり、社会的な地位が偶像になったり、財産が偶像になったり。いろいろなものすべてが——それが大事でその他はないというような——本当に絶対的な



ものでない、ある相対的な一切のどんな善きものも、みんなこれは偶像になる。いわゆる像を造った偶像とはもちろん非常に違うけれども、文明人はみんな自分の偶像を持っているわけです。

● 神を知る

9 今は神を知り、

「神を知る」ということは、キリストにいなければ、神は知れませんよ、いくら「神を知る」

なんて言ったって。神は絶対に隠されたものではありませんから。隠れたる神です。

「隠れたるに見給う、隠れたるに聞き給う」

とかいう、隠れた存在です。この隠れたる実体を現象したものが、即ち体現体がキリストなんです。体現者であるところのキリストにでつくわすまでは、私たちは神にでつくわすわけにいかない。この福音書でもって、聖書でもってでつくわされる。

パウロがこう言っている時はもちろん聖書なんかありませんよ。聞き伝えによって、

「こういう人がいた。この人は十字架にかかって復活した」

という、みんな証人がいるわけです。証し人が、証者がいるわけです。

「証者の言葉を聞きて信じたるにより」

というわけです。私たちには、その証者の言葉が書かかせられてある。それを読んで信じる者です。あるいは、

「それを説く人の話を聞いて信じたるによる」

ということになるわけです。

このキリストという体現者にぶつかって——これが決していわゆる宗教的天才でもなければ、偉人でもない、聖者でもない——これは正に神を現している者だというわけで、本当にその前に降参するまでは「神を知る」ことができない。降参することによって、キリストの前に本当に無条件に平伏すこと^{ひれふ}によつてはじめて、神を知ることができ。神を知るとは、キリストの前に無条件に降服して、

「参った!」

と驚嘆驚倒させられて、初めて神を知ること^{こと}ができる。いわゆる学問的な認識ではない。研究によつて知ったのでもない。それはいくらでも研究も、ある程度は必要でしょう。ただそれは本当に知っているのではない。

この「知る」が本当の知でないものだから。全存在なんだ。ヘブライ的な言葉なんです、この「知る」という字は。人格的に体当たりして、それを知ることが、このヘブライ語の「知る」ということです。そういった「知る」というのでなくて、ギリシャ的な知であつたら、「フィロソフィア」(哲学)という方面の知であつたならば、これは届かない。私たちも、友



人と深く交わって一緒に苦楽を共にして、初めてその友人を、友を知る。友を知るというのはそういうことです。

「その友のためには生命を捨てる」

というくらいに、互いに真意をもっていることが本当に「知る」ということ。「神を知る」とは、絶対にこのキリストに在って知るのであって、キリストを知ることによって神を知る。その他に知りようがない。そうすると、いろいろな現象を見ながら、本当にまた神が見えてくるわけです。キリストというのは結晶体ですから。

●「エピキュリアン」

寧ろ神に知られたるに、何ぞ復かの弱くして賤しき小学に還りて、再びその僕たらんと為るか。

本当に知ってないんです。本当にキリストを知れば、キリストは福音体ですから、この喜びの音信を本当に受けとつたらもう、「小学」の世界なんかどうでもよくなってしまう。「キリスト教」を知ったってダメですよ。キリストの教えを知ったって。とても、キリストの教えなんてものはもの凄いいからね、たいてい嫌になつてしまう、キリストの教えなんていうものを知ったら。だから私は、言葉は激しいけれども、

「キリスト教ではありません。これは福音でございます」

と言うわけです。人間というものは、本当に喜び楽しくいかなければ、もともとできないんですよ。ある程度はがんばつてやりますよね。そういう意味においては、「エピキュリアン」だよな。本当の「快樂主義」だ――快樂主義という言葉はおかしいけれども――本当の「エピキュリアン」です。楽しみそこにありと。樂園でありますから。「パラダイス・ロスト」(樂園喪失)という言葉があるが、「パラダイス・リゲインド」(樂園回復)だ。樂園を回復する。結局、ある意味において、人間はみんな楽しみを求めている。仏教だって、みんな楽しみを求めて歩いている。皆さんはこの会堂に楽しみを求めてやって来た。その楽しみの質が違ふわけです。楽しみにおいては同じことだ。

そういう意味において、楽音である。その喜びの音信、楽しみの音信。そこに力がある、そこに光がある、そこに真理があるというもののなんです。やめられないんです、この聖書というものは。聖書が他の本とはケタ違いにやめられないというのは、では、どんな楽しみか。

これは生命の生命なんです。私たちを喜ばせるところの生命の本当の生命だから。楽しみを求めているけれども、もっと深く人間の求めているものは結局、生命である。みんな死は嫌いなんだ。この生命を求めている。その生命中の生命を与えてくれるものが、このキリストの他にいないんだ。だから、これは最高、最大、最深の楽しみである。

クリスチャンがくすぶっていたら、それは本ものではない。どんなに忙しくても、どん



なに癪にさわることはありませんでも、もう一つ奥の世界に、もう一つ高い世界にいつも、「ああ、こういう環境に、こういう運命になっても、私はもう本当にいいよ。大丈夫だよ」

と、そこを本当につかんでいる世界が聖霊の世界です。いわゆる自分の信仰ではないんです。私はいろんなものにぶつかって、いつもそこに直ちに立ち帰る秘訣をだんだん覚えてきた。何があるうといい。どういうことにぶつかっても、私は決して失望落胆しない。

そういう喜びの音信です。だから、こんな福音を得たらば、

何ぞ復^{また}かの弱くして賤^{いや}しき小学^{かえ}に還^{かえ}りて、再びその僕たらんと為^するか。

この世のいろいろな道德の世界、単なる哲学の世界に帰って、再び――「新たに」と言ってもいいですが――その僕となろうとするか。ばからしいことではないかと。パウロはまた別なところでも同じようなことを言っています。

●底光の世界

10 汝らは日と月と季節と年とを守る。

これは即ち律法的なユダヤ教徒がやることなので、

「安息日はどうだこうだ」

とか。キリストは安息日も破ってしまった。新月だとか、あるいは聖なる月だとか、あるいは過越の祝いだとか、五旬節だとかいうのが「日と月」というわけです。それから、ヨベルの年だとか、安息の年だとか、そういった宗教的ないろいろなものを一生懸命で守っている。それで大いに神さまに誠実であると思ってみたり、本当の宗教生活をしていると思っているが、そういうことではない。これはもう既に預言者がそのことを言っている。

「憐れみと公平が大事なんだ。問題はそんな節会^{せちえ}のことではないぞ」

というわけです。

11 我は汝らの為に働^{はたら}きし事の或は無益にならんことを恐る。

せっかく福音を伝えたのに、またよりが戻ってしまって、やり直しかなあっていうわけで、パウロも嘆いてしまったわけです。

「絶対無条件の一番楽な、楽しい道を与えているのに、なぜ、そんな七面倒くさいことをまた始めるか。そして、自分の業^{わざ}というようなものにこだわるか」

と。

12 兄弟よ、我なんじらに請^こう、われ汝等のごとく成りたれば、

ユダヤ人の特権をみな捨ててしまつて、

汝ら我がごとく成れ。汝ら何事にも我を害^{そこな}いしことなし。

私のようにいわゆるユダヤ的な、伝承されたところの特権なんか捨ててしまえと。先程のパウロの、



「すべてのものを塵芥ちりあくたと思う」

というわけです。律法というなら、新しい「キリストの律法」というものがある。逆説的なものの言い方ですが、それは何もキリストのおきてという意味ではないですよ。

¹³わが初め汝らに福音を伝えしは、肉体の弱かりし故なるを汝ら知る。¹⁴わが肉体に汝らの試煉こころみとなる者ありたれど

何かパウロは病氣を持っていた。どうも目が悪かったという説がだいぶ強いけれども。あまりつらげまえがよくなかったらしい。

汝ら之を卑しめず、

なにか、人が見たら、あまり感じのいい様子をしていなかったとみえるね、パウロは。

又きらわず、反つて我を神の使つかいの如く、キリスト・イエスの如く迎えたり。

キリスト・イエスに似ているが如くに迎えてくれたと。パウロは外見がどうであつたかは知りませんが、普通ではなかったらしい。けれども、そういうゆがんだ外貌の奥に、素晴らしい姿が、彼の内側からの内なる姿が、内なる形があつたものですから、そこで、

「神の使の如く、キリスト・イエスの如く迎えたり」

という。それが底光そこびかりを発していたわけだ。上面うわつちな光ではない。底光を発していました。問題はそれが非常に大事なわけです。

もちろん、パウロは、使徒行伝に書いてあるように、パウロを通して素晴らしい業が出たときに、人々がパウロを神の如く拝もうとしたら、

「とんでもない。私はただの人間だ」

と言った。パウロもペテロも、神のように拝まれようとしたときに、退けた。そして、

「自分はただ罪びとにすぎない。我は罪びとの首かしらである」

と。「罪びとの首」と、自ら本当に文字通り彼は自覚していた。しょうがない野郎だと。しかし、このしょうがない野郎の中にまた、しょうがないものがある。それはこの本当の底光りの世界です。

●聖霊の宿り

こないだ、手島さんに第四号(曠愛新書第4号『旅に想う』)を送つてやった。彼はやはりよく読む。他の人の読まないことをちゃんと読んでいる。私は、

「あなたは大軍を持っています。私は孤軍だ。私は東京でまことに孤軍であるけれど

ども、少しも私はそれでおくびれてはいない。私は本当に始末の悪い男だよ」

と彼に書いてやった。イエス・キリストを本当にもつときには、もはや人との比較研究や、比較して人がどうであるかであるなんて、そんなことは問題ではなくなる。皆さん一人ひとり、本当にその意味における存在を自覚していく。そういう人たちが、言わず語らずのうちに、本当の信義をもつて協力していくんです。もうとにかく、人を見て、どうのこ



うのと言っているうちはダメです。

15 汝らの其の時の幸福はいま何処に在るか。

キリストを受けとったあの時の――私が福音を伝えたときにみんな喜んだじゃないか――あの改心の喜びは、今はどこへ行ってしまったのかと。皆さん、胸に手を当ててみてください。福音を信じたときに非常に喜んだ時があると思う。今はみなダメになっているなんて、私は言いませんよ。けれども、その初めの喜びがいよいよ内側でもって、いろんなことを経験して、

「どんなことがきても、このキリストの喜びには代えられません」

と言って、喜びの質がいよいよ深まっていく。そういった喜びをうちに持っているのなかったら。一切の経験が、すべての経験体験が全部これをプラスにしていくな、そういう経験の仕方をするためには、どうしても、この御霊が、聖霊が宿らしめられないとダメです。その信仰においてこの聖霊の宿りがいよいよ深くなっていく。

「聖霊が宿っているから、あの人はもうこんなことをしないだろう。あんなことはしないだろう」

なんて、そうじゃないですよ。人間というやつは、構造は複雑ですからね。また大いに人間というやつはダメなんですから。ちょうど、鉱石みたいにいろんなものがあるんだ。泥もあれば、鉛もあれば。けれども、鉱石はなるほど増大はしないだろうけれども、人間という鉱石は、そこに聖霊という金剛石が入ってくると、それがだんだん他のやつを金剛石に変えていく力を持っている。

「純粹、純粹」なんて言ってるね、いくら純粹に外側から自分でもって一生懸命で、

「福音は純粹だ」

なんて。これは無教会が好きなんだ、この「純粹」とか、「真実」とかいうのが。私は「不真実がいい」とも、「混合しているのがいい」とも言うんじゃないけれども、純粹だとか真実だとか言ってる力むと、かえってパリサイになる。

むしろ、本ものを内側に宿していけば――私はいろいろゴタゴタですわ――これがだんだん化せられてくる。これが本当の道なんです。これはもう本当です。私は経験から申し上げているので、頭でもって言っているのではない。いわゆる「純粹」と言うと、他を排除していくと、それが弾力性のない、なにか非常にパリサイになる。

ところが、何でもそれを受け容れると、別な例えで言うと、大洋のごときものになる。海の大洋はみんな何でもかんでも取り入れてしまう雄大なものです。そして、何で汚いものを浄化してしまうかという、塩というのがある。

「汝らは地の塩なり」

と言う。太陽の光がそうですよ。この部屋には太陽の光は直接入ってはいない。けれども、ちゃんと光は浸透している。



「ずいぶん、蛍光灯があつて明るいな」

と思つても写真機に写らない。ところが、太陽の光だと、なにか暗そうに見えても写る。即ち、太陽の光というものは素晴らしい浸透力を持つている。化する力を持つている。回りを化する力をもつて――他を排他して、そして純粹になるのではない――それをみんなその中に取り入れて、それを化してしまふ。そういうわけで、その気合を、その心を本当に共感していただきたいわけです。

「幕屋には愛が足りないから、どうのこうの」

なんて、或る人は言っている。自分で愛をもつて化していけば、そんなことは何も言う必要はない。マイナスですよ、そんなことを言つたら。知らないまにその人に化せられていく。仏教の方に、

「並み居る者すべて文殊もんじゆとなれり」

というお話があつたですね。弟子どもが文殊に化せられたということをお話したことがある。「あいつは」と思つたところが、その僧侶が実は本当の仏の光を有もつていたから、いろいろな人たちがみなそれに化せられてしまつて、本当に祝福されたということであります。そのように、パウロは、ペテロやヨハネは、この聖霊の光でもつて回りを化していく。

●初めの喜び

だから、あの喜びは非常な喜びであつたものだから、

我なんじらに就きて証す、もし為なし得べくば己が目を抉えぐりて我に与えんとま
で思いしを。

「目」のことが書いてあるので、パウロは眼病であつたと想像されるわけです。

「あなたのためには私の目を片一方上げましよう」

とまで言つてくれたではないかと。

16 然るに我なんじらに真まことを言うによりて仇あだとなりたるか。

本当の福音を伝えたら、逆に仇となつたか。どういふことかと。

17 かの人々の汝らに熱心なるは善き心にあらず、汝らを我らより離して己ら
に熱心ならしめんとてなり。

そういう党派はいかん、党派心は。党派的なことになつて、知らないまに「俺たちは」というようなわけで、やりだす。もう、ガラテヤ教会でこういうことが起きている。

本当に信仰を、キリストを、この福音を私たちが今、

「御利益でも観念でもない。使徒たちが本当につかまえていたのと同質の信仰に行
かう」

と言うときに――重大な使命をおびていると思ひます――内側がなお人間的なことでゴタ
ゴタしているひまは本当はないわけです。もつと



「この福音のためには」

と、お互いさまがこの喜びでもってつつ走っていけば、他のことは知らないまにどこかへ雲散霧消して進んで行く。

「第二義的なことを問題にしたらダメですよ」

と私が言うのはそのことなんです。人間だもの、躓いたり転んだりするさ。けれども、「ひとつ、大に行こうじゃないか」

と互いに助けながら行くのが本当のすがたです。そして、悪かったときには、

「ああ、私はまちがった」

と、正直言えばいいのさ。隠すこともないさ。人の悪を告発することもないし。

そういうようにして、どうも、甲と乙とがうまくなければ、お互いにキリストの十字架を前にして、語り合ったらいい。必ず解けます。キリストの十字架で解けないことはないはずです。もし、あるならば、それは本当に贖いを受けとっていない。キリストが私たちを無条件に赦したんですから。私はその赦しによってゆるされた。相手が反抗している限りは、仕方がないよね。何かやっているかぎりには仕方がないけれども。相手が

「まちがっていました」

と言ってくれば、

「はい」

と私はいつでも無条件に赦す。それは、キリストが私を無条件に赦してくださるからです。そういうことで進んで行くのでなかったら。まあ、それはどこの教会でも、無教会でも、幕屋でも、何でも、みな同じことですよ。問題は、

「本当にキリストが中心に太陽の光となつてその集会にあるか」

ということですよ。それがなかったら、どんなにそれが善きそうにみえても、整ったようにみえても、それはまだ本ものではない。それは人間的な整いにすぎない。ここでもパウロが書いています。

「汝らを我らより離して己らに熱心ならしめんとてなり」

と。昔からそんなバカげたことが、もうパウロの時代から始まっている。

¹⁸善き心より熱心に慕わるは、ただに我が汝らと偕におる時のみならず、
^い何時^{いつ}にても宜^{よろ}しき事なり。

「善き心より」というのは、本当に福音に即した心です。

●衆生本来神なり

¹⁹わが幼兒^{おきな}よ、汝らの衷^{うち}にキリストの形成るまでは、我ふたび産^うの苦痛^{くるしみ}を
なす。

今日のお話の中心はこの一節であります。「わが幼兒」という言い方は――ヨハネがよく



やりましたが――パウロはここでしか使っていない。非常に特別な使い方をしている。

「わが子らよ」

とパウロは深いキリストの愛をもって呼びかけたんです。

「汝らの衷にキリストの形が成るまで」

とある。新しい訳では何とあるかな。

「ああ、わたしの幼な子たちよ。あなたがたの内にキリストの形ができるまでは、わたしは、まともや、あなたがたのために産みの苦しみをする。」

「形が成る」と言い方は、英語でいうと、受け身の未来完了形です。直訳すると、

「キリストが形造られてしまうまでは」

という意味です。「形」というのは名詞ではない。

「キリストというものが、キリストがお前さんたちの中に形成されてしまうまでは」

ということ。「人間形成」「人造り」なんて言うが。「形成されてしまうまでは」という完了形です。ギリシャ語でいうと、可能法の受身の形です。

「キリストが形成されてしまうまでは、産みの苦しみをまたしますぞ」

と。もうパウロはここでは「信仰の」なんのと言わない。

「キリストが形づくられてしまうまでは」

と言う。御存知の通り、創世記1章の26、27節のところに、

「神の形の如くに造られた。神の形の如くに人を造り、男と女に造った」

とある。もちろん、あれは神話でありますから、昔の人は具体的に素朴にそう思った。いさ、それで。その素朴な考えや表現の奥に実は、啓示の真理が隠されている。啓示の真理は即ち、そんな外側の形ではない。それは内的な形、内形であります。「ネフェシユハーヤー」「生ける霊」となる。これは素晴らしい神話です。仏教の方でも、

「衆生^{しゆじやう}本来^{しんげ}仏なり」

と言う。衆生は本来、仏である。正に本来、仏です。本来、神なんです。

「衆生本来神なり」

です。我々は本来、神であり、仏である。

「キリストは神であるか、神の子であるか」

なんて、下らないことを言っている。「下らない」なんて言ったら悪いけれども。本来、神と同質に造られてある。

「本来、仏である」

というようなことを言われて、もし、なんとも言えないうれしい気持ちにならないならば、それはだいいづれてるわけだ。本来、神のすがたに私たちは造られている。うれしいと同時に、まことに申し訳ないなあと思う。

大体、人間だってそうじゃないですか。皆さんはみんな親から出ている。みんな似てい



るでしょ、お父さんとお母さんのどっちかに。似姿なんだ。親の似姿です。どこも似てないかと思ったら、耳の形が似てたとかね、いろいろあります。これはしょうがないんですから。ちゃんと同質なものが来ているんだから、どこかへそれが表れるわけです。それがたとえ外側に表れないようにみえても、ちゃんとその気質に表れている。あるいは、

「歩き方を見ていると、あれはお父さんにそっくりだ」

なんて。何もまねしているのではないけれども、それが動作に表れてくる。ものの考え方に表れてきたり、また音声に表れてきたり、声が似てみたり。とにかく、全然似ない子なんてはないはずだ。「鬼子」なんてことを言うけれども、必ず似ているはずだ。それはとにかく、ちゃんと生命の原質がその中に入ってきて、それで形成されたものなんだから。正に内的なものによって形成される。人間の親子の関係はするように、誰が何と言ったって仕方がないように出来ている。親の悪口は、それは自分の悪口ですよ。そういうことになる。だから、「父母を敬え」ということは本来、そこから来ているわけです。

●無私

キリストが神の霊を受けて、あのような神と同質な存在をした。「私は何もできない」とキリストが言われた。

「私は何も言えない。神さまが、父がやってきて、そこで行為させ、ものを言わせているだけだ」

とキリストが言われたのは、その通りです。

「私は本来、自分のものなんてものはありません。私なんてものは本来無所有者でございます」

というのが「無私」ということです。私有なんてものはない。みな「親有、神有」である。親が有っている。神が有っている。

あなた方は、真理に対して本当に喜びがあるだろうね。聖書を楽しんでいると、何でも本当にうれしくなってくる。そして、そこから本当に真理に対して虚心坦懐な驚異と喜びがわいてくる。それは何でもそうです。

「我は真理なり」

と言う。本当にキリストは真理です。そうすると、いろんな他の真理が楽しく、本当の研究ができる。そして、その本質を見破ってしまう。ゲーテなんていうのはそういう角度の魂だった。

それですから、子が親によって形成されて、親の質を形成して、これは止むにやまれずして――

「俺はいやだ」

なんて言ったってダメですよ、これは――ちゃんとその質が入っているんだから。その



「止むを得ざるなり」

という世界です。パウロが、

「われ福音を宣べ伝えずば禍害^{わざわい}なるかな。止むを得ざるなり」

と言ったでしょ。なぜ、パウロは止むを得ないかというと、キリストと同質な福音がやってきて、御霊のキリストが彼の中に形成されているから、もう仕方がないんです。パウロは福音せざればいられない。

「たとえ、キリストに捨てられても、この同胞^{はらから}のためには私は福音を伝えざるを得ない」

とパウロはロマ書9章で言っている。

そのような止むにやまれざるどころの在り方。これが天的必然といわれる。

「天的な必然が本当の自由である」

と申し上げている通りです。天的必然こそが本当の自由である。エレミヤがそうだ。

「わが骨の中に神の言が火の如くあるから、黙ろうとしたって黙るわけにいかない。そうしては、みんなに誤解され迫害されるけれども、仕方がないんだ」

と。あのエレミヤがそう言っているでしょ。

「千万人といえども我往かん」

というのはその精神です。なにも孔子さんばかりが偉いのではない。孔子さんと同質なものが皆さん一人ひとりの中にある。男でも女でもそうです。私はそういう、止むに止まれざるものがあなたの方の中に発してくれば、もうなにをかわんやです。もうそれでいい。これが何か私心があったら、必ず行き詰まる。ガタガタになる。そういうことになります。

19 わが幼児^{おきなご}よ、汝^{うち}らの衷^{うち}にキリストの形成るまでは、我^{われ}ふたたび産^{うみ}の苦痛^{くるしみ}をなす。

「御霊のキリストが形成されるまでは、私はまた産みの苦しみをして、お前さんた

ちの中にキリストを産みつけるぞ」

と言うんだ、パウロは。

● 根源の原動力

私は伝道をし、後期に入るけれども、いつまでしているかは知りません。もうだいぶ世界の様相も危機的であります。だいぶおかしくなっている。世界がいよいよ——キリスト教国と言わず、何と言わず——神に背ける事態になつてきたときに、この聖書の真理が、

「もはや止む得ざるなり」

という、このキリストがわがうちに形成されていく。同質なものが絶対無条件に入るといふことがハッキリします。いかなる業^{ごんぎよう}も、いかなる勤行^{ごんぎよう}も何もいらん。

人間はみんな生まれつきの性格はいろいろですよ。なかなかそれが本当に外側に現れて



こないかも知れない。カントが「道徳哲学原論」で言っているとおり。けれども、この生命が入ってきたならば、それが本当に展開していくことは、必ずなる。必ず展開していく。自分を乗り越えていく。自己突破していく。自己突破して進んで行く。行き着くところを知らない。

皆さん、ちょっと瞑目して、さっき言った「アバ、父よ」と、あるいは「主よ」という一言を全存在をもつて言うときに、そういう生命力は、

「私は無条件にお前の中で動きだす。私は無条件にお前の中で光となる、生命となる。知となる、愛となる、真理となる」

と、来ますから。それが、道を歩こうが、何をしてようが、電車の中にいようが、台所にいようが、どこにいようが、常住坐臥、楽に根源の原動力となって進んでいくなら、それが聖霊の世界です。

「何か特別な業をしなければ聖霊でない」

なんて、とんでもない話だ。それはその日常生活において自由自在に現れてくる。もし「文化」というなら、

「本当の文化を花咲かせていくものはこの聖霊の世界だ」と、ハッキリ申します。

どの世界でも、究極のところはそこから来てなければ、決して本ものにならない。私は学校の先生だけれども、いろいろ回りを見ていて、これはもうハッキリしている。「キリスト教」なんて言うのと、すぐ何か教えかと思ってしまうて、何か固苦しいものだと思ってるが、とんでもない話だ。だから、これを形成させるまでは、本当に産みの苦しみなんだ。何とかして、私は本当に万人がつかめるように、キリストの福音を書きたいと思っています。

●キリストの御霊の人

20 今なんじらに到りて我が声^かを易えんことを願う、汝らに就きて感えばなり。
妙なことが書いてあるな。今までパウロはガラテヤ書で、

「しようないではないか、お前たちは」と言っていたが、

「もう、しかし、怒るのはやめたよ」

と、19節でガラリ変わった。それで、「我が声^かを易えんことを願う」と、本当に愛惜してお前さんたちを^{いたわ}りたいと思うというような気持ちだと思います。

もうその先は、あとは読むことはない。アブラハムの子にサラの子とハガルの子があつて、サラの子は「自主の女」の子でハガルは「奴隷の女」の子で、ちょうど律法の世界はハガルの子のようなもので、サラの子は即ち天のエルサレムの子らである。即ち、「サラの子」というのは、キリストの霊をいただいた、神の国を嗣ぐところの、天のエルサレムの子ら



だと。そんなことを大胆な比喻でパウロが言つて、

「お前たちは約束の子だ」

という。さっき私が言つた、親の質を確かに受けとつていうという、この比喻が非常に大事な比喻です。キリストと同質なもの、あのアタナシウスが言つた「ホモウシオス」なのです。

「キリストは神に似ているのではなくて、神と同質である」

と言つて、あの時に戦つたのがアタナシウスであつた。これは似たつてダメですよ。「らしい」くらいなことではダメです。外側はどんなに似ないようであつても、内側で本当にそれと同質である。同じ質、本性を持つている。そういう同質であるためには、絶対に聖霊であります。私たちはみな霊的存在ですよ。

「人間は万物の霊長」

と言うでしょ。魂のないやつはいないわけです。その魂に神の霊がくる。キリストの十字架で、自分という自我というものがすつ飛ばされていくということを樂に受けとつて、そこに受けとるものが聖霊である。

あい変わらず、私は自我があります。そんなことは構いません。そんなことは苦にすることは無い。奥に、贖われてあるという、魂の一番根底の自覚です。魂の一番根底の自覚。その自覚は本当に平伏しの自覚ですから。この平伏しの自覚のところには御霊がきている。キリストの御霊ですよ。キリストが贖つてくださったんですから。いわゆる霊的な何かが分かるなんて、そんなことではない。

そうしたらば、皆さんは本当に既にキリストの御霊の人であるのです。そのことにもう気づけば、直ちに祈りの世界、直ちにキリストの霊気の交流の世界に入る。そして、何ものにもとらわれないところに来たら、もうそれはハッキリと聖霊の世界です。そして、それは必ず生命となり、光となり、愛となつて、作用していくところのものであります。変質させていく。周りを変質変貌させていくところの強いものですから。連鎖反応を起こさせるようなものです。

「これは大事なものだ」

なんてとつておくものではない。ずんずん放射していく。放射能みたいなもの。これが本当の世界です。

もう、しゃつちよこばつていない必要はないですよ。そして樂ですよ。何かえらく、信仰的真剣とか何とか言つて、えらく真剣になつてしまつて、かえつて逆に人を審いたりする。もつとゆつたりしたものです。ゆつたりしたもので、これはちよつと説明できないね。だから、パウロを読めば、

「はい、はい」

と。ヨハネを読めば、「はい、はい」と。ペテロを読めば、「はい、はい」と、みんな分かつ



てしまう。みんなその聖霊の世界から、表現が違ったって、みんなつかめてしまう。

「パウロはこうだが、ヨハネがこうで、その間の関係はどうだ、差がどうだ」

なんて、そんなこと言ってやしませんよ。そんなことを言わなくなったって、ちゃんと掴めてしまう。いわゆる信仰、いわゆる研究、いわゆる聖書の字義の解釈なんてのは――それはいくらやったっていいよ――けれども、それでは始末がつきませんよということです。

だから、私みたいなのは全く始末の悪い人間ですから、把みようがないですよ、把もうとしたって。私も「神学」なんて、言うことはいくらでも言いますけれども、そんなこだわった組織神学なんてものは書くことはない。有機体的なもの、オルガンニッシュなものです。人間の体^{からだ}みたいなのです。イエスという方に本当に連なるのは、そのような私たち自身が体の手足である。我々は、皆さんは――私は指だか足の先の何だか知らんけれども――とにかく、みんな一体となつて、のつぴきならない役割を、使命をおびている。もう、この使命のためには、

「ボーイズ・ビー・アンビシャス」(青年よ、大志を抱け)

だ、本当に。女性も同じです。日本の女性は重大な使命を負っている。実は、歴史を動かしている大事な底の力は女性である。男はえらく威張つて何かやっているようだけれども、本当の力はむしろ女性の中にあると言つても決して過言でない。

そういうようなわけで、みなそれぞれ大事な使命を負っています。本当に抱負を大にして進んでいただきたい。もう、すったもんだはありはしない。ことに青年たちは大事だよ。しっかりやってくれ。いかなるところにお勤めしよう、証人であることにおいてはひつとも変わりがない。

「もし、キリストを拒まば、我れ汝を天において父の前で知らぬと言わん」

とキリストは言っておられる。そういうわけでございます。

このガラテヤ書4章19節のこの一節、

「我らの衷^{うち}にキリストの姿成るまでは」

と、パウロが悲願している言葉です。イエス・キリストが、

「わが形がお前たちのうちに成るまでは、私はお前を決して離さないぞ」

というのがキリストの本願であります。しかも、それは

「絶対無条件に受けとれ」

という、こういう世界です。豁然^{かつぜん}として、その魂の開かれていく世界です。では、終わります。

